様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０２０３７

研究課題名（和文）現代社会の医療化・心理学化に関する実証的比較研究

研究課題名（英文）An Empirical Comparative Study on Medicalization and Psychologization in Modern Society

研究代表者
佐藤　雅浩（Sato, Masahiro）

埼玉大学・人文社会科学研究科・准教授

研究者番号：５０７０８３２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、現代社会の様々な領域で進展しつつある医療化（＝従来は教育・宗教・法・家族等の領域に委ねられていた問題が医療的な介入の対象となること）と心理学化（＝心理学的な知識や技法が日常生活の多様な局面に介在するようになること）について、複数の事例を調査し比較することで、それらの類似点や相違点を明らかにすることを目指した。その結果、医療化の典型的な事例と考えられてきた精神疾患や精神障害に関する問題領域においても、問題への医療的な介入が著しい領域と、問題の心理学的な解釈が一定程度の影響力を有する領域があることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
過去半世紀以上にわたって、社会の医療化もしくは心理学化に関する多くの社会学的研究が積み重ねられてきた。しかしこの二つの現象が、どのような領域において、またどのような関係性のもとに進展してきたのかについては、特に日本社会を対象とした比較研究が十分とは言えない。本研究ではこの不足を補うと同時に、社会の医療化もしくは心理学化がもたらす私たちの社会生活上の変化やその将来的な見通しについて、より深く考察するための基礎的な視点を構築した。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to delineate the contemporary characteristics of medicalization and psychologization in modern society. Medicalization refers to events traditionally understood as educational, religious, legal, or family issues now being approached via medical interventions. Psychologization involves the application of psychological knowledge and techniques to various aspects of daily life. In particular, this study aimed to discern the differences in the progression of medicalization and psychologization by examining and comparing multiple case studies. The results of the study indicated that even within problems conventionally related to mental illness and mental disorders, which have been considered typical cases of medicalization, there exist areas where medical intervention is significant alongside areas where psychological interpretations of the problem wield a certain degree of influence.

研究分野：社会学

キーワード：医療化　心理学化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

前世紀の後半以降、医科学的な知識や西洋医学を基盤とした医療技術の発展・普及に伴い、その一般社会への影響を批判的に検証する研究が蓄積されてきた（Freidson 1970a, 1970b; Zola 1972; Illich 1976）。このうち、近代西欧に起源をもつ医科学的な知識が社会全般の領域へと浸透し、さまざまな現象の解釈や応対を医療的なものへと変化させていく事態は、社会学において「医療化」概念として定式化されてきた（Conrad 2007）。論者により強調点の違いはあるものの、「医療化」とは、それまで他の社会領域（宗教・司法・教育・家族等）に属するとされてきた現象が、次第に医学的あるいは医療にかかわる現象として再定義され、またその過程において、医療が社会統制の役割を拡張していくことであるとされる（Conrad & Schneider 1992）。また、このような医療化に対する学術的関心が高まった時期は、同時に心理学や精神分析的知識の社会への普及がもたらす影響についての研究が進展した時期でもあった。すなわち 20 世紀の後半以降、心理学や精神分析的知識の一般社会への普及がもたらす影響について先駆的な研究が遂行され（Berger 1965）、アメリカ社会に深く根付いたセラピー文化の影響について考察した研究も公刊された（Bellah et al. 1985）。また 2000 年代以降になると、日本においても社会の「心理学化」もしくは「心理主義化」を指摘する複数の研究が実施され（森 2000; 樫村 2003; 片桐・樫村 2011）、心理学・精神分析的知識の日常への普及がもたらす社会的な影響についての知見が日本国内でも深められていった。医療／医学と心理学／精神分析は、前者が主として人間の身体、後者が人間の魂を扱う知＝技術といえるが、20 世紀後半は心身医学（psychosomatic medicine）に関する理論や学説の発達に見られるように、両者の相関的な影響関係についての認識が、一般社会でも注目されていった時期にあたる。このように「医療化」と「心理学化」という二つの社会的変化を記述する概念は、20 世紀後半における「人間」に対する専門知の介入と、その社会的影響について考察するための、相補的な研究視角として形成されてきたと言える。

２．研究の目的

本研究課題は、上記のような 20 世紀後半以降の研究蓄積をふまえ、現代社会において進展する「医療化」もしくは「心理学化」に関する複数の現象を、日本社会を主たるフィールドとして、社会学的な実証研究の手法を用いて比較しつつ分析しようと試みるものである。上述したように、近代社会における「医療化」や「心理学化」の進展については、これまで国内外において多くの理論的・実証的研究が蓄積されてきた。しかし 2000 年代以降の現代社会を対象として、複数の事例を比較しつつ、社会の医療化と心理学化を総合的な見地から分析した研究は多くない。そこで本研究においては、「うつ」や「発達障害」「自閉症」「社交不安障害」「摂食障害」「自己啓発」といった複数の事例を比較しつつ分析することで、現代日本社会における「医療化」と「心理学化」の様態を、実証的な手法を用いて明らかにすることを企図する。また上述した複数の事例を比較することで、対象領域ごとの「医療化」もしくは「心理学化」の進展度合いの相違や、その動向に影響を与えている諸要因の異同などを明らかにし、既存の医療化論・心理学化論に対して、新たな社会学的知見を提供することを最終的な目的とする。

３．研究の方法

研究の方法としては、主として文献・資料調査と、調査票やインタビューを用いた社会調査の手法を用いる。これらの手法を用いて、上述した複数の事例において、医療化・心理学化がどの程度、いかなるメカニズムによって達成されているのかを考察する。その際本研究課題においては、第一に、それぞれの問題領域において専門家らが海外の知識を導入するために記した資料（学術論文、学術書等）や、それらの知識を広く一般社会に普及させる目的で作成された文書（大衆雑誌、啓蒙書、新聞記事等）を分析し、知識の導入と普及の過程を考察する。また第二に、それぞれの問題領域において自らを障害や疾患の当事者と認識している（あるいはカテゴライズされる可能性のある）人々、それらの人々に対して治療や援助を行っている専門家や支援者等に対して調査票調査や面接調査等を実施し、上記のような医学的・心理学的知識や介入のための技術が、当該領域において実際にどのように用いられており、その効果について関係者はどのように認識しているのかを明らかにすることを目指す。第三に、一般人口を対象とした統計的研究を実施し、社会の「医療化」や「心理学化」に対して肯定的／否定的な意識を有する人々の属性的特徴や、他の意識／行動変数との関連を考察する。

４．研究成果

(1)医療化／心理学化に関する知識の普及とその社会的帰結に関する研究

まず本研究課題で対象とした諸事例について、学術的な意味での知識導入が日本社会においてどのように行われたのかについて文献調査および一次資料の調査をもとに検討したところ、

以下のような知見が得られた。すなわち、本研究課題と特に関連の深い精神疾患に関する学術知は、19 世紀末までに各種の医学雑誌および先駆的な日本人医師による著作、海外文献の翻訳等によって国内に紹介されていたが、そうした動向がさらに本格化するのは 20 世紀初頭以降のことである。そこでは精神の病について専門的に考究する専門誌や学術集会等において、各種の症例報告や海外の学説紹介が行われ、西欧精神医学の知が国内の医療専門家の間にも共有されていった。また当時の専門家らは、当初から西洋医学的な精神疾患の知識を広く社会に啓蒙する意図を有しており、各種の講話会やマスメディア等を通じて、一般の臨床医や非専門家に対しても、精神医学的な知識の普及を図っていた。心理学に関しても知識導入の経緯や時期は類似しており、19 世紀末から先駆的な研究者による知識の普及が図られ、20 世紀初頭以降は大学や教育機関、専門誌、啓蒙書等を通じて、心理学の知識が学界や一般社会に導入されていった。そして 20 世紀後半になると、さらに発展したマスメディアや高等教育機関等を通じて、欧米由来の精神医学・心理学・精神分析等の知識が広く大衆にも普及していくことになった。本研究においては特に「うつ病」もしくは「躁うつ病」を対象として、20 世紀後半の新聞および大衆誌における言説構成の過程について検討を行った。

また本研究においては、上記のようなプロセスを経て社会に広まった医学的・心理学的な知識が、当事者らによってどのように受容され、人々の自己認識や行動をどのように変容させているのか、また専門家らはその現象をどのように評価しているのかについて検証を行った。その結果、次のような知見が得られた。まず当事者らによる医学的・心理学的知識の受容に関して、精神疾患への罹患経験がある人々に対する社会調査から得られたデータを分析したところ、多くの当事者らは医療専門家による正式な診断を受ける以前から、各種のメディアから得た情報をもとに、自己の精神状態を治療が必要な状態であると認識していた。そのような認識が構成される局面において利用される主たるメディアとしては、マスメディア（書籍・雑誌・新聞・テレビ等）やインターネット上の各種メディア（SNS やブログ等）を挙げる回答者が多かったが、それ以外にも身近な人からの助言や情報を参考にしたという経験者も多く存在した。また、医療機関において何らかの診断を受けた後に参考とした情報としては、医療機関における医師やカウンセラーからの助言を挙げる回答者が多かったが、診断前と同様に、マスメディアやインターネットから独自に情報収集を行ったという回答も多くみられた。以上の点からは、精神的な不調を抱えた当事者らが、自ら主体的に医学的あるいは心理学的な情報にアクセスしていること、またこうした一般的な行為が、現代社会における「医療化」や「心理学化」の大きな動因の一つとなっている可能性が示唆された。この点は、かつて P．コンラッドが現代社会における医療化の大きな推進要因として、自己医療化を行う当事者（＝消費者）を挙げた事実とも適合的な知見と考えられる（Conrad 2005）。

ただし、医療専門家を対象とした調査結果からは、このような知識の普及が、逆説的に「医療化」や「心理学化」を抑制する可能性についても洞察を得ることができた。すなわち、精神科医を対象とした意識調査においては、彼らの多くが「うつ」を始めとする大衆化された精神医学的概念に対して懐疑的な見解を有しており、その背後にあると推察される診断カテゴリーの改変や、医療業界の動向、医薬品業界の影響力などについて、自覚的あるいは批判的な意識を有していることが明らかになった。具体的に言えば、精神科医たちは *DSM*（アメリカ精神医学会の診断マニュアル：*Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders*）に代表される操作的診断基準の浸透や、都市部における精神科クリニックの増加、製薬企業による疾患啓発マーケティングの効果等によって、診断に至るまでの各種障壁が低下し、結果として精神疾患の診断を受ける人々が増加しつつあるのではないかという見解を共有していた。またこうした構造的要因だけではなく、現代における人々のストレス耐性の低下や若者のパーソナリティ変容、未熟な人格の増加といった患者側のパーソナリティ要因を、診断数増加の背景として指摘する回答も存在した。以上のような医療者側の意識を前提とすれば、今後は臨床現場で医療者が「うつ」や「発達障害」に代表されるような大衆化された診断概念や、そうした概念に包含される患者の病像に対して、抑制的（非同情的）な態度で向き合う行う可能性が指摘できる。このような事態が到来すれば、当該の概念は医療者によっても当事者によっても、適用することが忌避されるラベルとなるかもしれない。この可能性をより敷衍した形で表現すれば、「医療化」や「心理学化」の帰結として社会に普及した大衆的な医学／心理学的な概念は、関連する諸アクター間での行為や意識レベルでの様々な相互作用が行われた結果、意図せざる結果として、逆説的に「医療化」や「心理学化」を抑制する効果をもつ可能性が指摘できる。

(2)異なる問題領域を対象とした医療化／心理学化の比較研究

以上のような当事者もしくは医療者を対象とした調査の分析結果を前提とし、本研究ではさらに、研究代表者および分担者が行った調査研究の成果を比較しつつ、現代社会における「医療化」と「心理学化」の実態について検討を行った。その結果、本研究課題で対象とした諸事例においては、とくに精神疾患の原因論や治療論に関する領域において「医療化」と「心理学化」の趨勢が共存する形で進展している場合が多いことが明らかになった。例えば「うつ病」を事例に考察すれば、現在のうつ病治療においては投薬や通電療法、経頭蓋磁気刺激治療など、生物医学的な原因論に基づいた治療法が広く用いられている。また多くのうつ病患者が医療機関での治療を推奨されている現実を踏まえれば、現代社会における「うつ」は基本的に医療化された現象であることがわかる。しかしそれと併存する形で、認知行動療法（Cognitive Behavior Therapy:

CBT）などの心理学的なアプローチも、近年では広く認識され活用されるようになった。さらに当事者や専門家のあいだでは、生活習慣の改善や適度な運動、就労環境の調整など、その他の要因論に基づく状態の把握や治療も重視されつつある。この状況は「社交不安障害」においても類似しており、選択的セロトニン再取り込み阻害薬等を用いた薬物療法と、認知行動療法などの心理学的な療法が併用される場合が多い。ただし、同じ精神疾患としてカテゴライズされる問題であっても、摂食障害をめぐる状況はやや異なる。すなわち摂食障害は、医学的な診断や治療の対象とされる場合が今日では多いという意味で医療化された現象ではあるが、その原因論や治療論においては、純粋な生物医学モデルに基づいた言説が構成されることはまれであり、心理・社会的要因が強調される場合が多い。また当事者の認識としても、問題の契機となった出来事と、その根本原因は区別されて語られる場合が多く、そこでは自身のパーソナリティや家族の問題、仕事上の出来事などが発症の要因として言及される傾向にある。

(3)医療化／心理学化に関する一般人口を対象とした意識調査

本研究課題においては、上記に加えて社会の「医療化」や「心理学化」に対して肯定的あるいは否定的な意識を有する人々の属性的特徴や、他の意識／行動変数との関連を考察する目的で、調査会社が保有するモニターを対象とした統計的研究を行った（調査名：健康と生活に関する意識調査、2020 年 11 月実施）。調査手法はインターネットを介した調査票調査であり、調査対象者は委託企業に登録している 20～79 歳の男女 1000 人（人口構成比に応じた性別・年齢別均等割付：男性 495 名、女性 505 名）から回答を得た。調査項目は基本属性（年齢、性別、最終学歴、職業、労働時間、同居人数、子供数、居住形態、居住地、個人年収、世帯年収）および健康行動や病気行動、罹患経験やメンタルヘルスに関する意識項目である。このうち今回の研究期間においては、特にメンタルヘルスに関する意識項目を従属変数とし、回答者の属性、受療経験、メンタルヘルス用語の認知度、医療系メディアや健康情報への接触度等を独立変数として、両者の関連を考察した。具体的に使用した従属変数は、「①精神的な問題を抱えている人は、薬によって治療すべきだ」および「②精神的な問題を抱えている人は、カウンセリングによって治療すべきだ」という質問項目（回答は「そう思う」から「そう思わない」の４件法に対する択一選択）に対する回答であり、①に賛成で②に反対の意向を示した回答者を医療化の趨勢に親和的な回答者、①に反対で②に賛成の回答者を心理学化に親和的な回答者とみなして、各独立変数との関連を検討した。単純集計としては前者の類型に該当する回答者が 73 名（17.2%）、後者に該当する回答者は 352 名（82.8%）であり、心理学的な治療に親和的な回答者の方が多数派であった。なお残りの 575 名は、明確な志向性が見られない対象者として分析から除外した。上記①②の回答類型を従属変数とし、サンプルを全体および男女別に分けてクロス集計による有意性の検定（χ^2 検定）を行った結果、独立変数の中で有意な関連が見られたのは以下の諸変数であった。

第一に基本属性の中で関連が見られたのは個人収入と同居人数であり、個人収入が比較的高い女性（450 万円以上）および独居もしくは 4 人以上の家族と同居している男性において、医療化された治療法への選好が見られた。これは正規雇用もしくはそれに近い形態で労働に従事している女性や、扶養家族を有すると推察される男性において、投薬治療に代表される医科学的な治療の即効性への期待が大きく、また独居男性においては自助努力や個人主義的な心性と医療化された治療法との親和性が高いためと推察される。なお年齢については 20 歳代の回答者を除外し、回答者の年齢層を 30～40 歳代と 50～70 歳代の 2 カテゴリーにわけて集計すると、前者の壮年層の男性において、医療化された治療法への志向性との親和性が見られた。これも勤労世代において就労継続や治療における即効性への期待が関連しているものと推察できる。

第二に、回答者の健康意識や受療経験、医療への信頼度との関連を考察したところ、医療化あるいは心理学化への志向性と関連のある変数として、長期にわたる受療経験や代表的な疾病への罹患経験、歯科医への通院頻度などが関連していることが判明した。このうち長期（6 ヵ月以上）にわたる受療経験と罹患経験については、特に女性回答者において代表的な疾病への罹患や長期療養の経験がある回答者ほど、医療化された治療法への志向性との関連が見られた。また歯科医への通院頻度においても、頻繁に歯科医へ通院していると回答した女性回答者ほど、医科学的な治療を志向する傾向にあることが判明した。これらの結果から、特に一般人口における女性は身近な身体的不調を医学的な治療によって解決しようとする志向性が強く、その傾向は自身の闘病経験や受療経験によってさらに強められる可能性が示唆された。ただし罹患経験との関連で言えば、「うつ病／うつ症状」の経験がある回答者（N=19）のうち、63.2%が投薬治療ではなくカウンセリングによる治療を推奨している点には注意が必要である。すなわち、自身がメンタルヘルスに関する不調を経験した回答者においてですら、必ずしも医療化された治療法が当事者の高い信頼を獲得しているわけではないことがわかる。

第三に、回答者の健康配慮行動との関連としては、これらの行動全般の多寡を示す合計得点との関連は見られなかったものの、回答者が継続して服用している処方薬や市販薬の有無、また塩分摂取量に対する意識に関して関連が見られた。すなわち女性においては継続して服用している処方薬があると回答した対象者ほど、また男性においては継続して服用している市販薬があると回答した対象者ほど、医療化された治療法を支持する傾向にあった。これは自身の服薬に関する習慣化された行動が、医療化された治療法を支持する意識を形成する可能性を示唆すると同時に、性別によって医療機関から処方される薬剤の服用習慣が関連するのか、自らの選択によって購入する医薬品に対する信頼が関連するのかについての差異があることが推察される。ま

た塩分摂取量に対する意識に関しては、男性回答者において、塩分の摂取を控える行動をしていない回答者ほど、医療化された治療法を支持する傾向にあった。この関連については解釈が難しいが、世間に流布する健康情報に影響されず、主体的に自己を構築する意識の強い回答者ほど、治療の側面においては苛烈（heroic）な治療法に期待する傾向があるのかもしれない。

第四に、回答者の病気行動との関連としては、対象者が自身の体調不良を認識した際の習慣化された行動傾向との関連が部分的に認められた。すなわち「体調がすぐれないとき、なるべく薬に頼らず治したい」という意見に反対の回答者（＝日ごろから薬に頼る傾向がある回答者）ほど、一般的なメンタルヘルス問題においても、投薬治療を支持する傾向にあった。また、「体調がすぐれないとき、まずは病院へ行くことが多い」と回答した人々ほど、同じく投薬治療を支持する傾向にあった。このことは、回答者の病気や体調不良に対する習慣化された対処傾向が、一般的なメンタルヘルス問題においても、医療化された治療法を選好するかどうかと関連している可能性を示唆したものと考えられる。

最後に、医療系メディアとの接触経験や接触頻度との関連を分析した結果、テレビ番組に関しては医療情報を専門とする番組（11 番組）を、いずれも「見たことがない」と回答した対象者ほど、医療化された治療法を支持する傾向にあった。換言すれば、こうした番組を視聴しがちな回答者ほど、心理学的な治療法（カウンセリング等）に対する親和性が高い可能性が示唆される。これに対して健康情報を専門に扱う雑誌（11 雑誌）については、特定の 1 誌のみ購読経験と医療化された治療志向に関連が見られたが、その他の雑誌は関連が見られなかった。またその他のメディアとしては、SNS 上の病気や健康に関する話題、あるいはラジオの健康番組への接触頻度が高い回答者や、知り合いからの健康情報への接触頻度が低い回答者において、医療化された治療を支持する傾向が見られた。以上のことから、マスメディアの医療情報は、個人の医療化あるいは心理学化に対する意識に対して明確な影響を及ぼしているとは言い難いが、テレビからの情報よりも SNS による情報を取得し、対面的なコミュニケーション機会の少ない人ほど、心理主義的というよりも医療化された知識や技術に親和的である可能性が示された。

【文献】

Bellah, Robert N. et al., 1985, *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*, Berkeley: University of California Press.（＝1991，島薗進・中村圭志訳『心の習慣――アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房.）

Berger, Peter L., "Towards A Sociological Understanding of Psychoanalysis" *Social Research*, 32(1): 26-41.

Conrad, Peter & Joseph W. Schneider, 1992, *Deviance and Medicalization: From Badness to Sickness*, Philadelphia: Temple University Press.（杉田聡・近藤正英訳，2003，『逸脱と医療化――悪から病へ』ミネルヴァ書房.）

Conrad, Peter, 2005, "The Shifting Engines of Medicalization" *Journal of Health and Social Behavior*, 46(1): 3-14.

Conrad, Peter, 2007, *The Medicalization of Society: On the Transformation of Human Conditions into Treatable Disorders*, Baltimore: Johns Hopkins University Press.

Freidson, Eliot, 1970a, *Professional Dominance: The Social Structure of Medical Care*, Aldine: Atherton Press.

Freidson, Eliot, 1970b, *Profession of Medicine: A Study of the Sociology of Applied Knowledge*, New York: Harper & Row.

Illich, Ivan, 1976, *Limits to Medicine: Medical Nemesis: The Expropriation of Health*, New York: Penguin.（＝1979，金子嗣郎訳『脱病院化社会――医療の限界』晶文社.）

樫村愛子，2003，『「心理学化する社会」の臨床社会学』世織書房.

片桐雅隆・樫村愛子，2011，「『心理学化』社会における社会と心理学／精神分析」『社会学評論』61(4)：366-85.

森真一，2000，『自己コントロールの檻――感情マネジメント社会の現実』講談社.

佐藤雅浩，2013，『精神疾患言説の歴史社会学――「心の病」はなぜ流行するのか』新曜社.

Zola, I., 1972, "Medicine as an institution of Social Control" *Sociological Review*, 20(4): 487-504.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 佐藤雅浩	４．巻 59(1)
２．論文標題 精神疾患言説における逸脱と医療化：「狂気の医療化」論再考	５．発行年 2023年
３．雑誌名 埼玉大学紀要（教養学部）	６．最初と最後の頁 39-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 櫛原克哉	４．巻 137(5)
２．論文標題 繁茂するメンタルクリニック：診断の普及で救われる人、救われない人	５．発行年 2023年
３．雑誌名 中央公論	６．最初と最後の頁 96-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 櫛原克哉、若林真衣子、添田雅宏	４．巻 74(4)
２．論文標題 精神科病院の長期入院および脱施設化の動向に関する考察：東京都多摩地域の病院スタッフを対象としたインタビュー調査から	５．発行年 2024年
３．雑誌名 社会学評論	６．最初と最後の頁 782-799
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐藤雅浩	４．巻 58(1)
２．論文標題 精神疾患の流行に関する社会学的研究(3)	５．発行年 2022年
３．雑誌名 埼玉大学紀要（教養学部）	６．最初と最後の頁 45-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 牧野智和	4．巻 34
2．論文標題 「自分ごと」と「織り込み」のデザイン：まちづくりワークショップの今日的展開から	5．発行年 2021年
3．雑誌名 年報社会学論集	6．最初と最後の頁 62-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤雅浩	4．巻 56(2)
2．論文標題 精神疾患の流行に関する社会学的研究(2)	5．発行年 2021年
3．雑誌名 埼玉大学紀要（教養学部）	6．最初と最後の頁 53-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 櫛原克哉	4．巻 49(2)
2．論文標題 消えない抗不安薬：精神医療と鎮静の文化	5．発行年 2021年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 54-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤雅浩	4．巻 55(1)
2．論文標題 精神疾患の流行に関する社会学的研究(1)	5．発行年 2019年
3．雑誌名 埼玉大学紀要（教養学部）	6．最初と最後の頁 51-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 櫛原克哉	4．巻 2
2．論文標題 社会の心理学化論と脳神経科学的な知識の普及に関する研究動向	5．発行年 2020年
3．雑誌名 東京通信大学紀要	6．最初と最後の頁 157-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 牧野智和	4．巻 47(13)
2．論文標題 反省性・巻き込み・個別解：続・参加のテクノロジーとその行く先	5．発行年 2019年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 128-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 牧野智和	4．巻 47(6)
2．論文標題 自己啓発	5．発行年 2019年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 200-205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 佐藤雅浩
2．発表標題 戦後日本のノイローゼ言説について
3．学会等名 第26回日本精神医学史学会大会
4．発表年 2023年

１．発表者名 山田理絵
２．発表標題 拒食の医学史
３．学会等名 UTCP研究・活動報告会
４．発表年 2024年

１．発表者名 櫛原克哉、北中淳子、東畑開人、日野映、蓮澤優、狩野祐人
２．発表標題 大学の学生相談・カウンセリングにおける「心理学化」の考察：心理職を対象としたインタビュー調査から
３．学会等名 日本社会学会大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 佐藤雅浩
２．発表標題 近代の新聞報道と精神医学
３．学会等名 日本精神神経学会学術総会
４．発表年 2021年

１．発表者名 櫛原克哉
２．発表標題 〈メンタルクリニック〉の社会学的考察：患者を対象としたインタビュー調査から
３．学会等名 多文化精神医学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山田理絵
２．発表標題 摂食障害と情報環境との関係：インタビュー調査を通じた時代的変化と現在の特徴の検討
３．学会等名 日本摂食障害学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 牧野智和
２．発表標題 まちと「自分ごと」のデザイン：まちづくりにおけるワークショップ活用形態の展開から
３．学会等名 関東社会学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 櫛原克哉
２．発表標題 精神科診療所の社会史：逸脱の医療化と消費主義の医療化のはざま
３．学会等名 日本社会学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 牧野智和
２．発表標題 ワークショップの社会学はどのように可能か：「反省性」を手がかりにして
３．学会等名 日本教育社会学会　第71回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Rie YAMADA
２．発表標題 Anorexia as an Intractable Disease in Japan
３．学会等名 Society for East Asian Anthropology Regional Conference (SEAA)
４．発表年 2019年

〔図書〕　計7件

１．著者名 北田暁大、東園子、辻泉、谷本奈穂、加島卓、南田勝也、石田あゆう、高野光平、牧野智和、今田絵里香、辻大介、松田美佐、村田麻里子	４．発行年 2023年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 304
３．書名 岩波講座社会学　第12巻　文化・メディア	

１．著者名 伊藤智樹、櫛原克哉、 添田雅宏、相良翔、鷹田佳典、石島健太郎	４．発行年 2024年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 144
３．書名 支える側・支えられる側の社会学：難病患者、精神障害者、 犯罪・非行経験者、小児科医、介助者の語りから	

１．著者名 牧野智和	４．発行年 2022年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 352
３．書名 創造性をデザインする	

1．著者名 櫛原克哉	4．発行年 2022年
2．出版社 青土社	5．総ページ数 336
3．書名 メンタルクリニックの社会学：雑居する精神医療とこころを診てもらう人々	

1．著者名 葛山泰央、佐藤雅浩、秦泉寺友紀、清水亮、野上元、李永晶、米村千代、祐成保志、赤川学	4．発行年 2022年
2．出版社 新曜社	5．総ページ数 248
3．書名 社会の解読力〈歴史編〉	

1．著者名 井上義和、牧野智和、中野民夫、中原淳、中村和彦、田村哲樹、小針誠、元濱奈穂子	4．発行年 2021年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 238
3．書名 ファシリテーションとは何か：コミュニケーション幻想を超えて	

1．著者名 水津嘉克，伊藤智樹，佐藤恵，相良翔，櫛原克哉，鷹田佳典	4．発行年 2020年
2．出版社 生活書院	5．総ページ数 217
3．書名 支援と物語の社会学：非行からの離脱、精神疾患、小児科医、高次脳機能障害、自死遺族の体験の語りをめぐって	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	牧野　智和 (Makino Tomokazu) (00508244)	大妻女子大学・人間関係学部・教授 (32604)	
研究分担者	櫛原　克哉 (Kushihara Katsuya) (00814964)	東京通信大学・情報マネジメント学部・専任講師 (32826)	
研究分担者	山田　理絵 (Yamada Rie) (70837335)	東京大学・大学院総合文化研究科・特任助教 (12601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関